

シビックプライドの解釈 市民の誇りが育む都市の誇り

Interpreting Civic Pride
City's Pride Fostered by Citizen's Pride

キーワード：『シビックプライド』『都市の誇り』『市民の誇り』『創造性』『源泉』

【要旨】

「都市に対する市民の誇り」を意味するシビックプライドは、歴史的には、ヴィクトリア朝期のイギリスの地方都市で中産階級の市民が自負をもって都市づくりに関与することを指していたが、現代では、限られた人々ではなく、多様なアイデアやスキルをもつ幅広い市民が都市で力を発揮する原動力となっている。市民が力を発揮するための社会的、技術的な基盤は整いつつあり、たとえばシビックテック活動では、市民がオープンデータやIT技術を活用して地域課題解決に取り組み、データや技術が入口となってシビックプライドにつながる例も見られる。別の調査からは、シビックプライドの因子のなかでも愛着は持ちやすい感情であり、そこから参画やアイデンティティにつながることで、「都市の誇り」となりうる諸要素が「市民の誇り」とも言えるシビックプライドの因子にどのようにつながるかが示唆されている。

伊藤 香織

ITO, Kaori

(東京理科大学 創域理工学部 教授)

1. シビックプライドとは何か

1.1 シビックプライドの概念

シビックプライド (civic pride) という言葉は、字義通りには「市民の誇り」や「都市の誇り」と捉えられ、一般には「都市に対する市民の誇り」を表す。都市がもつ誇れる事物や特徴のような「都市の誇り」の側面と、市民が関わり都市を振興していく自負のような「市民の誇り」の側面とがあるが、都市の誇りは市民に見出され守られあるいは育まれることによって初めて都市の誇りになるので、結局のところ、都市の誇りと市民の誇りはひとつの営みの両側面と言える。Collins (2017) は、シビックプライドは、総称としては「地域市民がいかに自分たちを特徴付けコミュニティとして自らを代表せしめるか、地方自治体がいかに場所を治め振興するか、人々がいかに地域に関わり地域に介入するか」に関わり、市民感情の観点からは「特定の場所に対する強いレベルの愛着や忠誠心、そしてそれに付随して、強いアイデンティティと所属の感覚」と述べて、都市、自治体、市民の関係に触れている。

1.2 シビックプライドの歴史

シビックプライドは、ヴィクトリア朝（1837 年～1901 年）期のイギリスの地方都市で重要な概念になったと言われる (Briggs, 1963)。ヴィクトリア朝は、産業革命の進展とともに、イギリスが急速に都市化し、中産階級の「市民」が台頭した時代であった。富を蓄え発言力を増していった名望家や篤志家と言われるような人々は、その富や発言力によって都市づくりに関与することが自分たちの社会的ミッションであり、徳であると考えていた。また、彼らの多くは進歩主義者・啓蒙主義者で、新たな空間やインフラ、博覧会などの新たな催し物に対して、世論形成をしたり寄付をしたりして、黎明期の近代都市をかたちづくっていった。こうした姿勢や行動がシビックプライド＝市民の誇りであった。また、その経緯から、市役所、図書館、ギャラリー、博物館など当時の新たに整備された公共建築はシビックプライドを象徴するものと見なされ、延いてはそれら自体がシビックプライド＝都市の誇りとなっていく。たとえば、リーズの旧タウンホール（図 1）は、医師・社会改革者・市民名士のジョン・ディーキン・ヒートン等によるロビイング団体が中心となってリーズ・マーキュリー紙などで世論を形成したことで建設が推進され、1858 年に完成して以来、現在までもシビックプライドの象徴と言われ続けてきている。また、「19 世紀後半にマンチェスター、バーミンガム、リーズなどの都市で行われた衛生面の改善は、改革者たちがそのステイタスの象徴である広い大通りを誇示するようになり、壮麗さを表す言葉の一部となった」（Shapely, 2012）ように、進歩的な都市を象徴するインフラもシビックプライド＝都市の誇りとなった。こうした象徴的な空間や出来事を通して、市民の誇りが都市の誇りとなり、都市のアイデンティティを形成し、周辺他都市に対して誇ることで、都市間競争にもつながっていった。

このような動きは、イギリスに限ったことではない。たとえば、前橋（現・群馬県前橋市）では、幕末から明治にかけて生糸商人等の「前橋二十五人衆」と呼ばれる領民たちが近代黎明期のまちづくりを支えた。前橋は江戸中期の利根川の氾濫や藩主の転封を機に 100 年間の藩主不在の不遇の時代を経験したが、横浜開港によって生糸の主要生産地として活気を取り戻した。その折りに活躍したのが前橋二十五人衆で、前橋城の再建や県庁誘致活動を実らせ、寄付によって公共建築の建設を実現している。こうした動きは前橋に限ったことではなく、「民の力」がまちづくりを支えてきた地域は少なくないのではないか。

さて、ヴィクトリア朝のイギリスで盛りを迎えたシビックプライドは、20 世紀



図 1 リーズの旧タウンホール

に入って中産階級の関心が地域政治から国家へと移り、また、反-都市文化や田園への憧れとともに、急速に衰退していった (Shapely, 2012)。その後は、まちづくりの主な担い手は地方自治体になっていったが、1980年代から再び民間の力が重視されるようになり、特に、ミレニアムの前後にイギリスで都市再生が盛んになるとともに、再びシビックプライドに言及されることが増えていった。

2. 市民の力

2.1 市民の拡張

ヴィクトリア朝のシビックプライドの担い手は、中産階級という狭い意味の「市民」であり、同時期の労働者階級の人々にはシビックプライドのようなものはほとんど知られていなかった (Hunt, 2004)。その後多くの努力が費やされて市民概念は拡張し、現代では、「誰もが」市民として地域に参画することが期待されている。

かつてのような中産階級や行政などにまちづくりのアイデアやスキルが集中している社会ではなく、多様な知識や創造性が遍く存在している社会では、誰もがその一端を担いうる。その際に重要になってくるのが、シビックプライドではないだろうか。イギリスの初代コミュニティ及び地方政府大臣を務めた David Miliband は、2005年の就任の挨拶で、「シビックプライドがなければ、互いを尊重し自治能力を持つコミュニティへの意欲は頓挫してしまう。シビックプライドによって、その動機、ひらめき、報いがもたらされる。シビックプライドは、集団の行動や個人の自発性の原動力である」と述べている。すなわち、シビックプライドがあるからこそ、まちのために活動したいという動機、どのように成し遂げるかのアイデアのひらめき、まちがより良く変わっていくことが自身に報いとしてもたらされる。市民のもつ多様なアイデアやスキルが地域で効力を発揮する原動力になるのがシビックプライドなのだ。

一方、市民一人ひとりがまちを動かしていくための社会的、技術的な基盤は整いつつある。たとえば、意見を発信しアイデアを共有できる SNS 等のコミュニケーションツール、目標を共有する人々から資金調達ができるクラウドファンディング、公的な情報にアクセスし活用できるオープンデータ、実際に自ら情報を取得できるセンサーの小型化・廉価化などを通して新たにできるようになったことは多い。

2.2 シビックテックの例

ひとつの例として、シビックテック活動を紹介する。シビックテックは、市民がデータや IT 技術を活用して地域的な社会課題を解決する活動のことである。「Code for X (地域名)」を冠した活動体が多く、2012年に活動を開始した Code for Kanazawa を皮切りに、現在は 80 を越える Code for X が存在する。地域によって活動は様々だが、2013年に活動を始めた Code for Saga の場合 (安藤 他, 2024)、主な活動として、グループでアイデア創出し成果を競

う「アイデアソン」や提示されたテーマに対してプログラミング成果を競う「ハッカソン」などのコンテスト形式のイベントへの参加，社会課題解決のための「アプリケーション」開発，地域/地方/国内/国際という様々なレベルの「交流」などがある。

2013 年からの活動を見ていくと，社会的背景や参加者の関心によって活動内容が移り変わる一方で新たな活動内容が新たな参加者を引き寄せており，活動と参加者は互いに影響しながら変容していた。また，初期にはデータ可視化の興味深さに惹かれて集まった参加者が活動を盛り上げていったが，次第に単なる興味だけでなく自身のスキルで地域課題解決に寄与できるのではないかという手応えを感じ始めてアイデアソン，ハッカソンへの参加やアプリケーション開発に取り組むようになった。多くのメンバーはもともと「自分たちの地域が好き」ではあったが，活動を通して自身の可能性に気づくことでシビックプライドが意識されるようになっていたといえる。なお，その後 Code for Saga は佐賀市の事業の担い手にもなり，官民連携（あるいは官-市民連携）の段階へと進んでいる。

参加者属性は，IT 系の仕事に従事する者や行政関係者が比較的多いが，それ以外の属性の参加者も少なくない。シビックテック活動はプロボノと捉えられるケースもあるが，必ずしも本務と市民活動を明確に切り分けるものではなく，行政関係者がシビックテック活動に参加したりシビックテックコミュニティが市の事業の担い手になるなど，スキルやアイデアを介して，市民活動と仕事とがときに解け合っていくこともある。仕事の捉え方が多様化している現代の状況が反映されていると言える。

3. シビックプライドの醸成

3.1 シビックプライド醸成のプロセス

シビックテックの活動からは，シビックプライドを持った市民が自負をもって地域に関わっていくというプロセスだけでなく，何らかのきっかけ（Code for Saga の場合はデータ可視化への興味）で活動をするうちに自らのシビックプライドに気づくというプロセスもあることが示唆される。したがって，市民参加や市民自治の重要性を説くだけでなく，様々な接点を用意しておいてまずは参加してもらうことも重要であろう。

シビックプライドの多面性を整理し分析した伊藤 (2017) では，シビックプライドに愛着，持続願望，参画，アイデンティティの因子が見出された。その中でも愛着は市民が都市に対して最ももちやすい感情であることが，今治市と富山市の事例分析から明らかになっている。それに対して，愛着から参画，参画からアイデンティティにつながっていく今治市（伊藤，2017），愛着からアイデンティティ，アイデンティティから参画につながっていく富山市（伊藤，2019）と結果が分かれたが，いずれも愛着を入口にして，参画やアイデンティティへとつながることがわかっている。これは，一見シビックテックの事例と逆に見えるが，シビックテック活動への参加は必ずしも自負をもって地域に参画していくことまでは意味していないので，地域への愛着をもっている状態から，シビックテック活動に参加すること

で意識的に地域課題解決のために参画していくようになるプロセスは、愛着が入口になって参画へとつながっていくという意味で共通である。

3.2 シビックプライドとその源泉

こうしたシビックプライド醸成のプロセスの中で、あらためて「都市の誇り」と「市民の誇り」の両側面の関係を考えてみる。伊藤（2019）は、富山市を事例に、シビックプライドの源泉（source of civic pride）としての都市の諸要素がシビックプライドのどのような因子に影響するかを、アンケート調査に基づく共分散構造分析で明らかにしている。海外のシビックプライドに関する研究のレビューや富山市民へのプレアンケート調査で見出されたシビックプライドの源泉となり得る都市の諸要素について、市民としてどの程度誇りに思うかをアンケート調査で聞き、併せて、シビックプライド尺度でシビックプライドの多面的な度合いを測る質問をした。分析の結果として得られたモデル図が図 2 である。

まず、シビックプライドの源泉は「都市環境」「交通」「文化・産業」「食・自然」の 4 因子から成り、シビックプライドは前述の通り「愛着」「持続願望」「アイデンティティ」「参画」の 4 因子から成っていた。図に示されているように、「都市環境」「文化・産業」を誇りに思うことは、「愛着」「アイデンティティ」につながる反面、「食・自然」を誇りに思うことは「愛着」「持続願望」につながるものの「参画」の意識を弱めるという結果が得られた。

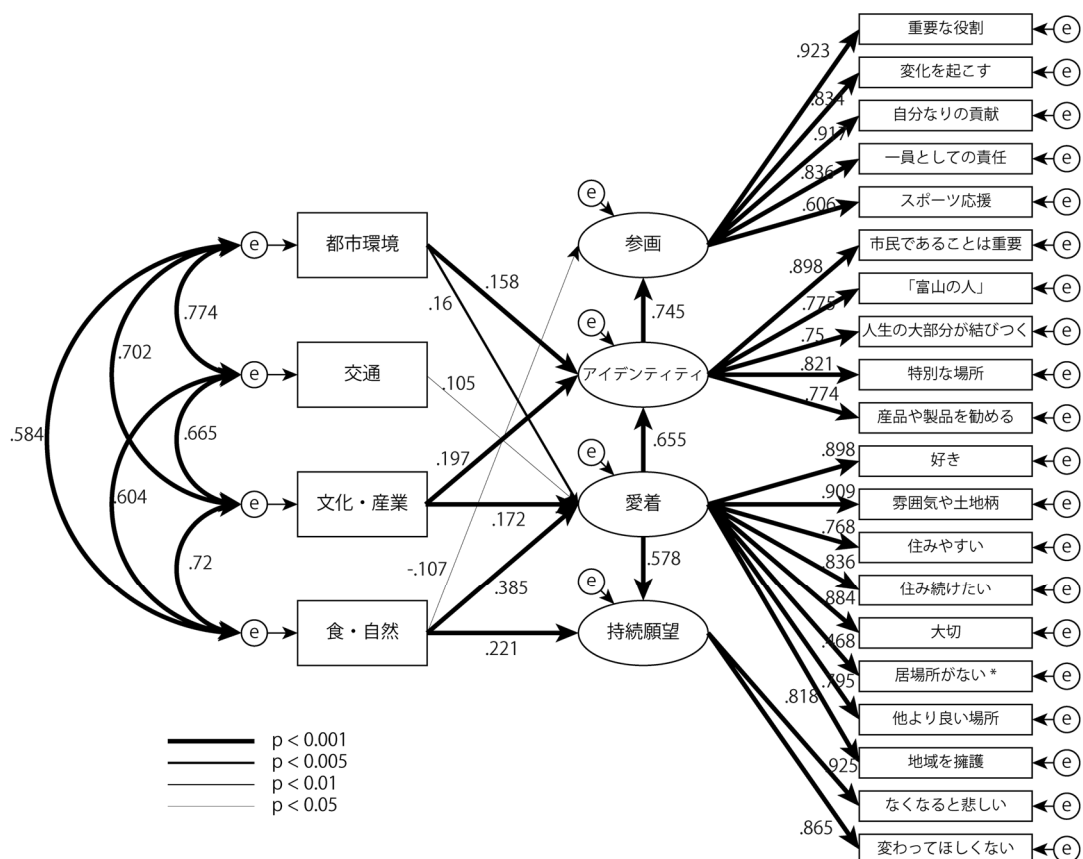


図 2 富山市民アンケート調査に基づくシビックプライドの構造的分析（伊藤，2019）

この結果に対して、「都市環境」「文化・産業」は有形・無形の違いはあるものの、ともに過去も含めた自分たち＝市民が創り出してきたものとして、「アイデンティティ」を強めると解釈された。一方、「食・自然」という因子は海外ではほとんど見られず、日本の都市に特徴的な因子である可能性がある。この因子は特に「愛着」を高めるが、自分たちで創り出したものというよりは自然の恵みとして与えられたものであり、そうした受け身の意識が「参画」に負の影響を及ぼしている可能性が考察された。

さて、シビックプライドの定義や歴史に立ち返ると、シビックプライドの源泉の因子は「都市の誇り」の側面を表しており、シビックプライドの因子は「市民の誇り」の側面を表しているとも考えられる。市民が創り出し手を掛けつづけてきた有形・無形の都市の要素は、市民にアイデンティティをもたらす一方で、日本らしい食や自然への感謝もまた地域への愛着という柔らかな感情をもたらす。市民が能動的・受動的に関わることで都市のもつ諸要素が都市の誇りになり、都市の誇りを見出し関わることで市民の誇りが育まれる。シビックプライドのプロセスは、このような都市と市民の相互作用と見ることができるであろう。

【文献リスト】

Asa Briggs (1963), 『Victorian Cities』 Odhams Press

Tom Collins (2017) 「Governing Through Civic Pride and Policy in Local Government」 Eleanor Jupp et al. 『Emotional States: Sites and Spaces of Affective Governance』, Routledge: 191-203

Tristram Hunt (2004) 『Building Jerusalem: The Rise and Fall of the Victorian City』 Weidenfeld & Nicolson Ltd.

Peter Shapely (2012) 「Civic Pride and Redevelopment in the Post-War British City」 『Urban History』 39(2): 310-328

安藤朋恵, 太田一帆, 伊藤香織, 高柳誠也, 瀬戸寿一 (2024) 「活動への参加状況にみるシビックテックコミュニティの変容: Code for Saga を対象として」 『実践政策学』 10(1): 77-84

伊藤香織 (2017) 「都市環境はいかにシビックプライドを高めるか: 今治市を事例とした実証分析」 『都市計画論文集』 52(3): 1268-1275

伊藤香織 (2019) 「シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素: 富山市中心市街地と富山地域を事例として」 『都市計画論文集』 54(3): 615-622